

〜のちを〜

ハイチに支援の輪

震災特集

約23万人もの犠牲者を出したハイチ大地震（今年1月）。倒壊家屋の下敷きになって身体に障害を負った「震災障害者」は4000人とも推計され、その支援が重要な課題になっている。障害者支援の構想を温める元駐日ハイチ大使のマルセル・デュレさん(60)が来日し、支援を訴えたほか、国際医療救護団体「AMDA」（本部・岡山市）が義肢支援を本格化させている。【川口裕之、写真も】

デュレさんは今年5月、ハイチ人音楽家のコンサートツアーに同行して来日した。

デュレさんが駐日大使を務めたのは91年から03年。阪神大震災の時は、たまたま米国にスにある自宅は震災で倒壊、危うく生き残った。これからの自分の時間をすべて自分のために使おうと、祖国復興での「大きな夢」として掲げるのは、地震で手や足を失った震災障害者やその家族が安心して

障害者に安住の地を



AMDAのメンバーも参加して開かれた震災障害者の集い。神戸市東灘区で6日



被災地からのメッセージ

全国から寄せられたメッセージカードを、復興住宅の住民の手渡し郵便箱（左から）に見る。

代表代理 鄭炳熏さん(58)
高齢者との文通の仲介や、復興住宅や独居高齢者の訪問は今も続きます。大きな問題は高齢化と家賃の公的補助の廃止。バリバリ働けない人は貯金を切り崩したり、小さな部屋に移らざるを得ない。心底感じるのはつながりの大事さです。横の連帯なしに防災都市化や防災訓練をしてもダメでしょう。年間3万人を超す自殺者の問題だって、つながりがあればここまでひどくはならないのでは。だからほぐらば中間に立っていろんな人たちをつないでいきたい。人間関係が一番基本的なつながり。それがボランティアの心だとも思います。

人と人とのつなぎ役

を得られるよう、農業施設の整備も構想している。デュレさんは、日本ができる支援として、ハイチ特産のコーヒーや絵画の購入、人材育成のための大学建設、耐震性に優れた建築方法の指導などを挙げた。



コンサートで支援を訴えるデュレさん。神戸市中央区で5月19日

経験生かし意見交換

日本の震災障害者の経験をハイチ支援にかそうと、AMDA代表部参事の難波妙さん(46)と看護師の石岡未和さん(29)が今月6日、神戸市であった震災障害者の「集い」に参加した。難波さんによると、ハイチの義肢支援には20以上の団体が携わっている。AMDAも義肢装具士を派遣するな

どしている。日本の震災障害者や家族からは、15年間の経験を踏まえた要望が挙がった。長女が高次脳機能障害を負った城戸美智子さん(67)「神戸市は『けがした人も早く元気になると』という声が震災直後に聞こえれば、『忘れられない』と思えたかも」と訴えた。面胸のしびれを引き締めた。